

社会を変えよう—越境力, 突破力, 創造力

【開催日】2024 年 3 月 8 日（金）12:15~13:00（オンライン開催）

【講師】遅 力榕（チ リヨウ）先生 龍谷大学短期大学部社会福祉学科 講師 博士：社会福祉学

今回は、2020 年 3 月に本学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期課程を修了し、同研究科助手を経て、現在は、龍谷大学短期大学部社会福祉学科で講師を務めていらっしゃる遅先生にご講演を頂きました。

1. 本日の講演の目的

私は、2014 年 4 月に同志社大学の博士前期課程に入学し、今年で 10 年が経ちました。1 つの節目として、自分のこれまでの失敗談を含め、色々な経験に関して、少しでも皆さんに提供できれば、大変、うれしいです。本日は、「社会を変えよう—越境力, 突破力, 創造力」という大きなテーマを設定しましたが、講演の目的は、キャリアパス、キャリアデザインに悩んでいる、迷っている大学院生、学部生にエールを送ることです。特に、現在、大学教員を検討している皆さんに対して、準備しておくとは有益なこと、或いは知っておいた方が良いことについて、お話しできればと思います。

2. 自己紹介

ここで、改めて自己紹介をさせていただきます。現在は、龍谷大学の短期大学部社会福祉学科で、講師として勤務していますが、私は、中国の大連出身です。大連は、関西空港から直行便で、2 時間余りで行くことが可能で、広場の多い観光都市として有名です。私は、2014 年 4 月に同志社大学の社会学研究科社会福祉学専攻に入学しました。前期課程 2 年間、後期課程 4 年間の合計 6 年間で、博士の学位を取得しました。在学中には、博士課程教育リーディングプログラムであるグローバル・リソース・マネジメント（GRM）の履修生としても活動しました。2020 年 4 月に同志社大学の社会学研究科に助手として着任し、2022 年 4 月から、龍谷大学の短期大学部に移りました。

本日の内容に入る前に、私の博士論文について、ご紹介します。私の博士論文のテーマは、「中国におけるボランティア活動の発展に資する中間支援組織の研究—日本のボランティア・市民活動の発展段階を踏まえて」というものでした。中国におけるボランティア活動（ボランティア活動、福祉活動、非営利活動等を含む広い概念）の健全かつ持続的な発展を図るために、その推進主体としての「中間支援組織」の必要性や役割、機能及び可能性について、特に日本におけるボランティア・市民活動の発展段階を踏まえつつ論じました。現在の専門分野は、地域福祉になります。現在のように、戦争や災害等の危機と苦難が多発している中で、「利他性」、「共感性」、「社会変革性」を持つボランティア精神の醸成、地域社会参加または社会貢献を促す善意の育成は、大変、意義があると確信しています。それと同時に、国連の持続可能な目標の達成、或いは、地球上の誰一人として取り残さないという願いの実現にも、ボランティア精神、市民性、社会参加の文化が欠かせません。誰でも参加しやすい地域社会の構築に注力しています。

3. 大学教員の仕事

大学教員はどのような仕事をしているのかという点については、あまり広くは知られていません。大学院生や学部生は、教員との関係が比較的近いですが、教員の仕事について、十分に理解するのは難しいのではないかと思います。一般的に、大学教員の仕事は、教育活動、研究活動、大学運営活動（学科会議）、社会貢献活動の概ね 4 つに分けられます。私の場合は任期付きのポストですから、大学運営活動の業務は、ほとんど回って来ないので、本日は、教育活動、研究活動、社会貢献活動をメインにお話させていただきます。

まず、教育活動ですが、私の専門科目として、「地域福祉」、「福祉サービスの組織と経営」、「ゼミ」、「ソーシャ

ルワーク実習・演習科目」,「国際福祉」等を担当しています。具体的な仕事の内容としては、授業をするだけではなく、授業前のシラバスの作成、授業の準備、授業後の宿題やテストの採点と出欠、成績の管理、学期中の個別指導、期末発表やレポート、試験の採点、評定の提出等が含まれます。特にゼミ生に対しては、長期間にわたる個別研究の指導、論文指導、学習に関する相談、推薦状の作成や進路相談があります。事前準備の時には、最新の社会情勢の変化に即して内容を調整し、授業に興味を持たせるような工夫を行っています。一方的な教授スタイルではなく、参加型の方式を取り入れながら、学生が主体的に学びあうことを意識しています。龍谷大学の短期大学部では、唯一の外国人、そして、新任教員として、授業の理解度や言葉の伝え方、学生からの評価について、最初は、幾つかの心配がありました。でも、学生の日々の変化や成長を通じて、やりがいを感じています。言語の壁を越えて、学生の一人一人を大切にする私の気持ちが、きっと伝わっているのではないかと思います。近年の教員採用では、授業経験の有無を問う所が増えています。大学教員を目指す皆さんは、大学院に在学中、或いは、助手として働いている間に、非常勤講師等で授業を担当する機会があれば、ぜひ、チャレンジして経験した方が良いでしょう。

次に研究活動ですが、大学院生の時にやっていたことと、あまり変化はありません。文献調査やヒアリング調査、フィールドワーク、国内外の学会参加や発表、論文の作成と学術雑誌への投稿等があります。現在、重点的に取り組んでいる研究課題は、いずれも科研費の支援を受けているのですが、「(研究代表) 中間支援組織によるボランティア参加への動機づけの有効性研究：日中比較を通して」、「(研究代表) ボランティアの心理的欲求を満たす動機づけメカニズム研究：参加支援の手掛かり」、「(研究メンバー) 福祉サービスの質と政策評価—東アジア3カ国(日本・韓国・中国)を中心に」の3つになります。このうち、研究代表として採択された2つの課題は、助手として同志社大学で働いていた期間中に申請したものです。最初は、書き方等で戸惑うこともありましたが、研究支援課による丁寧なアドバイスの下で、何回も修正を行って、最終的に完成しました。研究を進めるための文献の購入、学会参加のための費用、交通費、宿泊費等の費用を確保できれば、安心して、研究に集中することができます。そのためにも、学振や科研費等の助成金を活用することが有効です。申請書の書き方については、積極的に研究支援課へ相談することをお勧めします。

次に、社会貢献活動ですが、京都府若手自殺対策会議、外国人支援活動、高齢者孤独防止活動、子ども食堂、食料支援活動にも参加し、京都市内の様々な地域で活動しています。これらを見て驚く方もいらっしゃるかもしれませんが、研究室に籠って論文を書くようなイメージとは異なることが、お分かり頂けるかと思います。他の大学教員が、同じようなことをやっているわけではなく、皆さん、それぞれの研究スタイルがあります。私が今のスタイルに至った理由は、主に2つあります。1つ目は、私の専門分野と関連していて、社会福祉学は、現場の実践を大事にする分野です。特に地域福祉は、なおさらで、現状を知らないまま、語ることはできないと考えています。2つ目は、私の目標は、社会を変えろということなので、地域課題の解決に役立つような研究を行いながら、研究と実践の好循環を実現できる研究者を目指しているからです。龍谷大学に着任して2年になりますが、現在は、教育と研究と社会貢献活動をバランスよくこなすことが課題になっています。授業の準備に多くの時間を費やして、学期が始まると研究に充てる時間を確保することが難しい状況にあります。春休みと夏休みには、調査や論文の執筆に少し集中して取り組むことができましたが、今も適切な時間と労力の配分を模索している最中です。

4. 就職までのプロセス

ここからは、私の就職までのプロセスについて、お話します。まず、博士後期課程を修了して、助手として働くことになった状況について説明します。基本的に助手は、講義を担当せずに、研究及び教育の補助を行う立場になります。大学院生の支援も行いましたが、ポスドクや研究員のイメージに近いのではないかと思います。私が龍谷大学に着任したのは、2022年の4月でしたが、この時期は新型コロナウイルス感染症の影響で、授業の開始時期が延期され、オンライン授業が導入される等、大きな変化がありました。この時期を活用して、沢山の論文を執筆すべきだったのかもしれませんが、コロナ禍の中で、生活困窮者に対して何か支援できることはないかと思って、2022年の9月頃から、食料支援等の地域活動に参加し、そこで、現在の実践メンバーの仲間と出会いました。外国人であることを越えて、地域社会の一員として、共に地域を構築していくことを意識するようになりました。この経験は、私の立場にかなり影響を与えています。

次に、就職までのプロセスについて、簡単に説明します。2021年の2月から着手して、合計で7つの大学に応募書類を提出しました。このうち3つの大学で面接の機会を得て、最終的に2つの大学で「採用」となりました。（自身の経験から）評価のポイントは、学歴、大学での教育歴、業績の3つになるのではないかと考えられます。まず、学歴については、修士号以上が必要で、その分野での最高学位が望ましいとされています。次に、大学での教育歴も重要で、非常勤講師や非常勤教員からスタートする人が多いです。さらに、業績も大事で、論文や著書が含まれており、研究者としての実績が重要視されます。また、「いい大学」は何で判断するかということになりますが、偏差値、収入、研究環境、所在地等のように、それぞれの判断基準が異なるかと思います。基本的には、まず、ホームページから大学の建学の精神や社会的な役割、学部学科の構成、教員の紹介等を確認することが必要です。その大学のポリシーや強調されている内容から、どのような社会的な役割を果たしたいのか、どのような学生を育成したいのかが、大まかに分かります。また、知人に尋ねることも重要です。自身が関心を持っている大学に知人がいれば、直接、聞くことも大事です。自分自身にとって「いい大学」に就職するためには、候補となる大学について、できるだけ多くの情報を得ることが重要です。ちなみに、大学への就職に関しては、JREC-INというサイトがあります。このサイトは、研究者・研究支援者・技術者等の研究人材のキャリア形成・能力開発を情報面から支援する研究人材のためのポータルサイトです。私が就職活動を行う際には、ほぼ毎日、このサイトを確認していました。自分の専門分野について、どのような公募情報があるのかを検索してみてください。

5. 就職までの準備（アドバイス）

就職までの準備としては、私の経験から、博士学位、査読論文、学際的な学びの3点を挙げてみました。まず、博士学位ですが、「博士号は足の裏の米粒」という話を聞いたことがあるでしょうか。これは、取れないと気になる、取っても食べられないという意味です。しかし、現在の大学教員の公募条件や周囲の研究者の状況を見ると、博士学位は可能な限り早く取得する方がお勧めです。次に、査読論文ですが、これで挫折した経験は、多くの研究者が持っているかと思います。私の場合には、1年半にわたるやり取りの末に不採用となってしまう、その挫折から、しばらくは論文と向き合うことが難しくなりました。しかし、最終的には、査読者から頂戴した指摘を全て博士論文に生かしました。特に若手研究者や大学院生は、査読論文の執筆において、どのように書けばよいか、どうすればよいか、どのように注意すべきかという点で、迷うことが少なくありません。査読は、論文の質を担保するために欠かせないプロセスになるので、普段は、研究者との深い会話が少ない中で、建設的かつ具体的なコメントを通して学ぶことになります。査読者とのやり取りの中で、自分の論点を説明すること、別の角度から改めて自分の研究を検討することもできるのではないかと考えています。最後は、学際的な学びの経験です。近年は、研究が異なる学問分野を横断して関わることが求められています。1つの視点だけではなく、複数の視点や考え方を持って取り組む柔軟性や思考力が問われるようになっていきます。つまり、自分自身の専門分野にとどまらず、他の分野の知識も積極的に学ぶことが推奨されています。私の場合には、グローバル・リソース・マネジメント（GRM）プログラムで得た知見について、ご紹介したいと思います。このプログラムは、文理融合の視点で、今日、最も困難な状況にある国から新興国までを対象に、強靱な精神と高度な倫理観を持って活躍していくグローバル・リーダーの養成を目指しています。このプログラムの内容は多様で、宮古島でのオンサイト実習、和歌山での水力発電と風力発電の実験等を通じて、文系や理系、国籍を問わず、異なる文脈や背景を持った大学院生間の協働や交流ができました。このように異なる分野の学問領域に触れることによって、新たなアプローチや発想が生まれ、問題解決能力が向上します。実際に、スロベニアとドイツ等のEU諸国における難民問題について、現地調査も行いましたが、問題のリアリティに接近することで、グローバルな感覚を身に付ける良い機会となりました。このような知見やスキルを日本や中国のローカルな社会問題の解決にも応用でき、より包括的な視点から、物事を捉えることができるようになりました。

次に、アドバイスになりますが、まずは、同志社大学が有する資源を最大限に活用することです。図書館等の施設や設備、教員や研究者、先ほど紹介したGRMのようなプログラム、研究支援制度、留学支援制度のように、研究環境は非常に充実しているので、有効に活用しないともったいないと思います。特に同志社大学には、博士後期課程若手研究者育成奨学金のように、優秀な若手研究者を支援する制度もあります。博士後期課程に入学する際に34歳未満の方には、後期課程の学費相当額が給付されます。詳しい情報については、ホームページをご

確認ください。そして、2 点目は、学会等で発表し人脈を作ることです。学会のような場で得た人間関係が、情報収集には大いに役立つと思います。この考え方は、大学教員だけではなく、企業の場合でも同様です。学会の後には、同じ専門分野の研究者や専門家による交流会や懇親会が開催されます。研究者や学生にとって、学会への参加は、多くのメリットがあります。研究成果を相互に提供することを通して、新しい情報を得るだけでなく、同じ分野の研究者と出会い、ネットワークを構築することもできます。そのため、博士課程に進んだ際には、名刺の作成をお勧めします。3 つ目はポジティブシンキングです。私のような任期付きポストにいる大学教員や研究者は、常に競争的な環境に置かれており、論文の投稿活動や就職活動での不採択は、今後のキャリアの構築に対して、いかに影響を及ぼすのかというプレッシャーをいつも抱えています。肯定的な考え方や前向きな考え方を通して、心理的及び精神的な負担を軽減することができるかもしれません。結果だけではなく、そのプロセスや経験に焦点を当てて、自分がそのために費やした時間と労力を大切にしましょう。これらの全てが将来の挑戦で対処する際の自分の武器になります。この過程で得た知識とスキル、挫折から学んだ成長は、将来の成功にとって強力な基盤となります。

6. このテーマにした理由

最後に、なぜ今回は、「社会を変えよう―越境力、突破力、創造力」というテーマにしたのか、その理由を説明します。15 歳の時に、目の前にある厳しい社会問題に対して、社会を変えるという夢がありました。でも、社会を変えるという夢は、決して、容易に実現できるものではありません。知識やスキル、広い視野、人脈等が不可欠です。大学院での学びを通じて、これらの要素を身に付けて、ようやく、社会を変えるという夢に近づくことができました。夢に向かった道のりは険しいものでしたが、学びの中で得た知識とスキルが、今の私を支え、社会を変えるための一歩を踏み出す力となっています。2014 年から 10 年間の試行錯誤、挫折、立ち直り、模索を経て、ついに今の道に辿り着くことができ、本当に良かったと実感しています。現職は任期付きのポストですから、将来的には、次のポストを探すための就職活動を行う必要があります。でも、これからも精力的に学び続け、社会にポジティブな影響を与えるように、努力していきたいと思います。先が見えない、次のステップに進めない、諦めたいという時に、自分を信じて、もう一度挑戦し、壁を乗り越えて、新たな自分を作りましょう。ご清聴ありがとうございました。

※ ご講演の後、参加した学生との間で質疑応答も行われましたが、内容については、省略します。

【文責：高等研究教育院 加治木紳哉】

オンライン開催

事前申し込みが必要です

2023 年度 第4回「博士キャリアカフェ」3月8日(金)12:15～

社会を変えようー越境力、突破力、創造力

本学では、キャリアパス支援の一環として、アカデミア、企業、官公庁等を問わず様々な分野の博士学位取得者の方から、ご自身の経験や現在の状況について伺う「博士キャリアカフェ」を定期的に開催しています。講師の先生と、ざっくばらんに意見交換ができる貴重な機会となりますので、奮ってご参加ください。
なお、参加をご希望の方は、事前にお申し込み下さい。

【講師】

遅 力裕（チ リヨウ）先生 博士:社会福祉学

龍谷大学短期大学部 社会福祉学科 講師

同志社大学 社会学部 社会福祉学科 嘱託講師

【プロフィール】

2020 年 3 月, 同志社大学大学院社会学研究科 社会福祉学専攻 博士後期課程修了。同大学院社会学研究科助手を経て、2022年4月より現職。ボランティア・市民活動, 外国人支援活動, 小地域福祉活動に関する調査・研究・実践に携わる。

【日時】

2024年3月8日(金)12:15～13:15(ご講演 30 分, 懇談 30 分)

Zoom によるオンライン開催

【対象】

本学の学生及び教職員

【申し込み方法】

- 本ガイダンスは Zoom によるオンライン開催となりますので、事前申し込み制とさせていただきます。
- 3月7日(木)15:00までに、右のリンクもしくは QR コードからお申し込み下さい。参加用の URL をお送りいたします。



<https://forms.office.com/r/bjP96TzZVJ>

本件に関するお問合せ先: 研究開発推進機構研究企画課

TEL: 0774-65-8257

Mail: ji-knkak@mail.doshisha.ac.jp